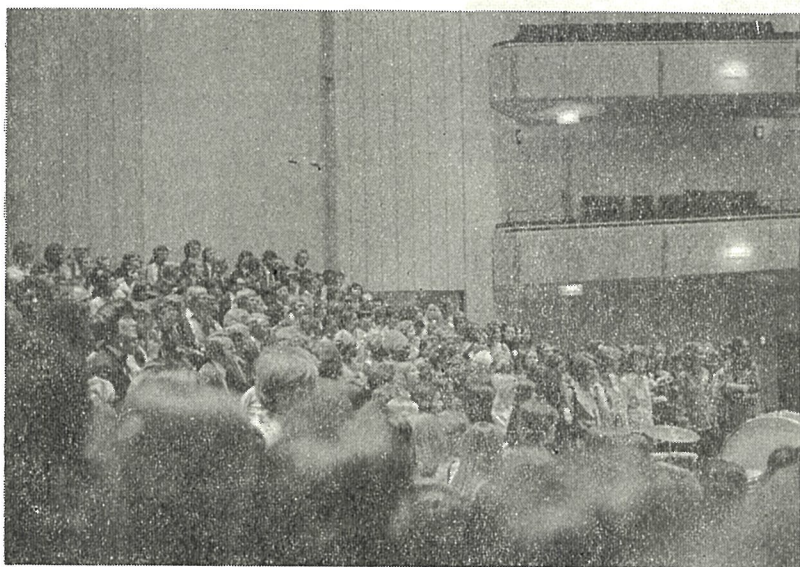


世界大学合唱祭に

参加して

大学グリークラブ



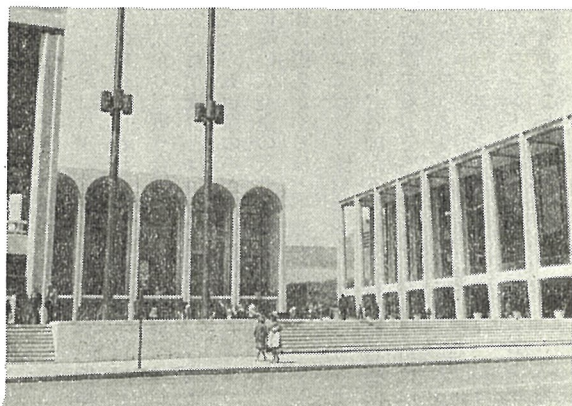
約五〇〇名の参加団員による合同ステージ
(ワシントン、ケネディ・センターで)

世界大学合唱祭は現在二年に一度、ニューヨークのリンカーンセンターの主催で行われるもので、世界十数ヶ国からその国を代表する大学合唱団が、合唱連盟等の推薦とリンカーンセンターのスタッフによるオーディションによって選ばれ、ワシントンとニューヨークで十日間にわたって行われるフェスティバルに参加し、その後二週間程度、アメリカ各地の大学を個別に訪問し演奏会を持つものです。ニューヨークでは三回の演奏会のほか、国連訪問や、文化的教育的催しも行われる。この合唱祭は今回で四回目を迎え、これを加えると、過去世界三十四ヶ国から、六十五の大学合唱団が参加したことになる。

—演奏旅行—

同志社グリークラブは、ワシントンとニューヨークのフェスティバルの前後、カリフォルニア大学、ミネソタ大学、リヴァーフォールとオウクレアのウィスコンシン大学、ウェイン州立大学、アーモスト大学、エール大学ハーヴァード大学、プリンストン大学、ワシントン大学の十大学と、中学

ニューヨークにあるリンカーン・センター
(右・コンサート・ホール 左・オペラ・ハウス)



と小学校を一つずつ訪問し、十回の演奏会を持った。この間のスケジュールは、かなりハードなもので、午後の十時半に演奏会を終えて（アメリカではほとんどの演奏会が八時半ごろに始まる）十一時半ごろに各自の宿泊所に着いて、翌朝、七時ごろには

次の訪問地へ向けて出発したことも幾度かあった。観光旅行的な要素は全くないと言つて良いほどの旅行であった。にもかかわらず、この演奏旅行がワシントンとニューヨークのフェスティバルにも増して、印象深く、忘れられないものとなったのは行く先々で、私たちを迎えてくれた、大学の学生や、ホストファミリーの人々の暖かい心遣いのおかげであった。演奏会は完璧に準備され、食事、宿泊、その他細かいところまでゆきとどいていた。飛行機かバスで訪問地に着くと、私たちは二、三名ずつ別れて（ときにはひとりで）、その日宿泊するホストファミリーの家へ車で向かい、リハールの時間まではそこで過ごすのである。だから、どうしても必要最低限のことは、話さなければならず、語学に弱いグリメンを四苦八苦させたが、十日もすると食事中に受ける、日本や大学に関する質問にもかなりはつきり答えられるようになった。短かい時間ではあったが、このようにアメリカ人の生活にじかに触れ得たことも、私たちの貴重な体験のひとつだと思ふ。

私たちの演奏に対するアメリカ人の反応

は、逆にこちらが驚かされるほど大きく、一曲終わるたびごとに大きな拍手があり、ほとんど毎回のコンサートで、アンコール曲を歌い終わると、聴衆は総立ちで熱烈な拍手をしてくれた。こういうことは、アメリカでも、そうたびたびおこることではないそうである。私たちにあびせられる賛辞も最大級のものばかりでしだいに割り引いて考えるようになったが、私たちが日常積み重ねていることが、外国でもある程度の評価を得たことは、この上ない喜びであった。私たちが、新島先生の母校アーモスト大学を訪れたころは一年中でも一番良い季節であるらしく、空は日本の秋のように青く高く、広い敷地に立てられた赤レンガの建物が芝生や木々の緑に映えて美しかった。アーモストでは、学生は試験で忙しうであつたが、コンサート後にウォード総長の官邸に招かれたり、ニューヨーク州ド地方を一望できるマウントホリオークに登ったりして楽しい時を過ごした。

— フェスティバル —

ワシントンに集結した十三ヶ国、オース

トリア、ブラジル、コロムビア、ハンガリー、リベリア、マラガシ（マダガスカル）、フィリピン、ポーランド、ルーマニア、スウェーデン、ユーゴスラビア、アメリカ、そして日本の合唱団は、長老派教会の大聖堂に集合した。そこで各国合唱団の紹介が行われ、フェスティバルの説明が英語、独語、仏語、スペイン語、日本語でなされ、フェスティバルのディレクターと合同指揮者の紹介が行われた後、参加団員全員、五百人余りで歌う合同ステージの練習がはじまった。練習とはいえ、様々な国から集まった、五百余の声が天にすい込まれるように高い大聖堂の天井に響きわたる様子は、体に震えがくるほど感激的であった。ワシントンではケネディセンターのコンサートホールで、各国が五分程度の自国の合唱曲を披露する「ガラ・コンサート」が行われ、ホストファミリーを交えての野外パーティーや、ホストファミリーごとのパーティーや、ワシントン市内見学、日曜礼拝などに参加することができた。

ニューヨークでは、ガラ・コンサートの他に、七団体ごとの個別演奏会が二回行わ

れた。最後のガラ・コンサートの日、ニューヨークはあいにくの雨もようであった。各国の合唱団はそれぞれの国の民族衣装を身に着けて緊張した面持ちで自分たちの出番を待っていた。同志社グリーククラブも、それまでの演奏会で自信はつけていたが、ひとつ失敗すれば大混乱に陥いる曲だけに



合唱団員の交歓風景（ニューヨークで）

油断できない。ハンガリーが終わった。次は我々である。長い間の積み重ねはこの数分のうちに集約されて現われる。大きな拍手に迎えられてステージに登る。今私たちはニューヨークフィルの根拠地アヴェリィ・フィッシャーホールのステージに立っている。聴衆二千八百。満席である。タクトが動く。……後はどうなったのかわからない。時間の経過は意識にない。……終わった。一瞬の静寂のあとわれんばかりの拍手である。ブラボーが聞こえる。会場がどよめいている。「やった」。全身から言いようのない感激がこみ上げてくる。もう前が見えない。

こうして、一月間のアメリカ演奏旅行のフィナーレを終えて、ホッとした気持ちと満足感をもって最後の訪問地、シアトルに向かった。ニューヨークでは、茶道裏千家から、ディナー（中華料理）の招待を受けた。日本人の教会の人々が日本料理の夕食会を催してくれた。日本食が恋しくなっていた私たちにとっては涙の出るほど嬉しいことでした。又、フリータイムを利用し

（五十三頁へ）